

耶穌降生千八百八十六年 米國聖書會

舊約 聖書

何西阿 約耳 西番雅

書

明治十九年

日本橫濱印行

02-KI

海老澤文庫

何西阿書

第一章

一これユダの王ウシヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの世イスラ
 エルの王ヨアシの子ヤラベアムの世にベエリの子ホセアに臨め
 るエホバの言ありニエホバはじめホセアによりて語りたまへる
 時エホバホセアに宣ひく汝ゆきて淫行の婦人を娶り淫行の子等
 を取きてこの國エホバに遠ざかりてはあなだしき淫行をなせばあ
 りニ是に於いて彼ゆきてデブライムの女子ゴメルを妻に娶りけ
 るあろの婦いらえて男子を産り四エホバまた彼にいひたまひけ
 る汝の名をエズレルと名くべし暫時ありて我エズレルの血
 をエヒウの家に報いイスラエルの家の國を辱るべしと
 り五ろの日われエズレルの谷にてイスラエルの弓を折べしとホ
 ゴメルまた孕みて女子を産けきバエホバホセアふ言たまひける
 汝の名をロルハマ(憐れぬ者)と名くべし我もいやイス



ラエルの家をわかれとて救すがどきことを爲さるべければなり
 然れどもユダの家をわかれまんの神エホバによりて之
 をすくゐん我の弓劍、戦争、馬、騎兵なせむよりてすくふことをせじ
 ハロルハマ乳をやめゴメルまた孕みて男子を産けるお九エホバ
 言たまひけるのろの子の名をロアンミ(吾民に非ざる者)と名くべ
 し其の汝らは吾民にあらず我の汝らの神に非ざるあり+然れ
 イスラエルの子孫の數の濱の沙石のごとくに成ゆきて量ること
 も數ふる事も爲がたく前にあんならわが民あらずと言れし
 の處にて汝らの活神の子ありと言きんとす+斯てユダの子孫と
 イスラエルの子孫の共に集まり一人の首をたてゝろの地より上
 り來らんエズレルの日は大あるべし
 第 三 章
 一 汝らの兄弟に向ひてハアンミ(わが民)と言ひ汝らの姉妹
 にむのひてハルハマ(憐なる者)と言へ+あんならの母とわけつ

らへ論辨ふとをせよ彼わが妻あらず我の夫にあら
 ざるありあんなら斯してかれおろの面より淫行を除かせろの乳
 房の間より姦淫をのぞかしめよ+然らざれば我かきを剝て赤體
 おしろの生をいでたる日のおどくおしまた荒野のごとくあらし
 め潤ひあき地のおどくらしめ渴によりて死しめん+我ろの子
 等を憐まじ淫行れ子等あればあり五あきらの母の淫行をあせり
 かきらを生る者の恥べき事をあてなへり蓋うれいへる言あり我
 いわが戀人等につきしたがいん彼らわがパン、わが水わが羊毛、
 わが麻、わが油、わが飲物なせを我お與ふるありと+この故あわれ
 荆棘をもてあんなの路をふさぎ垣をたてゝ彼おろの徑をえざら
 しむべし+彼はろの戀人たちの後をしたひゆけども追及とある
 く之をたづねれども遇ことなし是あおいて彼いん我ゆきてわ
 お前の夫にかへるべしおのときわが状態は今にまさりて善り

さとハ彼^{かれ}が得^える穀^{こく}物^{もつ}と酒^{さけ}と油^{あぶら}いと^とぶ與^{あた}ふるとある彼^{かれ}がパール^{パール}の
 ため^{ため}に用^{もち}ゐたる金^{きん}銀^{ぎん}のわが彼^{かれ}に増^{まし}あたへたるところあるを彼^{かれ}に
 しらざるありたこふよりて我^{われ}わが穀^{こく}物^{もつ}をろの時^{とき}におよびて奪^{うば}
 ひわが酒^{さけ}をろの季^きにいたりてうむひ又^{また}かれの裸^{はだか}體^{たい}をおほふに用^{もち}
 めべきわが羊^{ひつじ}毛^{のけ}およびわが麻^{あさ}をとらん^{とらん}今^{いま}われかきの恥^{はぢ}るどこ
 ろをろの戀^{こひ}人^{ひと}等^らの目^めのまへお露^あのすべし彼^{かれ}をわが手^てより救^{すく}ふも
 のあらじ^じ我^{われ}かき^きがすべての喜^{よろこ}樂^{らく}する^{する}あ^あに祝^あの^の新^{あらた}月^{げつ}のい^いひ安^{あん}
 息^{いき}日^{にち}あ^あよび一切^{いっさい}の節^{せち}會^{かい}を^をあて息^{いき}あめん^{めん}また彼^{かれ}の葡^ぶ萄^{たう}
 花^{はな}果^{くわ}樹^{じゅ}を^をろてあ^あいん彼^{かれ}さきに此^{これ}等^らを^をさしてわが戀^{こひ}人^{ひと}の我^{われ}にあ^あた
 へし賞^{たま}賜^もなり^{なり}と言^いし^しおわれ^{われ}て^てを林^{はやし}とあし野^のの獸^{けもの}をしてくら^{くら}に
 しめん^{しめん}わが^{わが}の^のれが耳^{みみ}環^わ頸^{くび}玉^{たま}あ^あを掛^かて^てろの戀^{こひ}人^{ひと}ら^らを^をあ^あたひ^ひゆ
 き我^{われ}を^をわ^わす^すき香^かを^をた^たきて事^{つか}へし^しもろ^{もろ}の^のパール^{パール}の^の日^{にち}の^のゆ^ゆを^を
 もて^{もて}ろの^の罪^{つみ}を^を罰^{ちが}せん^{せん}エホバ^{エホバ}かく言^いた^たまふ^{まふ}斯^かる^るの^のゆ^ゆを^を我^{われ}か^かき

を誘^{いざな}ひて荒^あ野^のに^にみ^みち^ちび^びき^きい^いり終^{つひ}にか^かれの^の心^{こころ}を^をあ^あぐ^ぐさ^さめ^めあ^あして
 を出^いる^るや直^{ただ}ちに^にわ^わき^きか^かれ^れに^にろの^の葡^ぶ萄^{たう}園^{えん}を^を與^{あた}へア^アコ^コル^ル(患^{あや}難^な)の^の谷^{たに}を^を
 望^{のぞ}の^の門^{もん}とあ^あしてあ^あたへ^へん彼^{かれ}わ^わの^のかり^{かり}し^し時^{とき}の^のど^どく^くエ^エシ^シブ^ブト^トの
 國^{くに}より^{より}上^のり^りきた^{きた}り^りし^し時^{とき}の^のど^どく^くう^うして^{して}お^おて歌^{うた}う^うた^たい^いん^んエ^エホ^ホバ
 言^いたま^まふ^ふろ^ろの^の日^{にち}に^にあ^あん^んぢ^ぢ我^{われ}を^をふ^ふた^たう^うび^びパ^パアル^{アル}と^とよ^よバ^バず^ずして^{して}イ
 シ^シ(吾^{わが}夫^{つと})と^とよ^よバ^バん^ん我^{われ}も^もろ^ろの^のパ^パアル^{アル}の^の名^なを^をか^かき^き口^{くち}より^{より}ど^どり
 の^のろ^ろき^き重^{かさ}ね^ねて^てろ^ろの^の名^なを^を世^よに^に記^き憶^{おく}せ^せら^らる^るふ^ふと無^なら^らあ^あめ^めん^んろ^ろの^の
 日^ひあ^あは^は我^{われ}う^うき^きら^ら(吾^{わが}民^{たみ})の^のた^ため^めに^に野^のの^の獸^{けもの}ら^らの^の鳥^{とり}あ^あよ^よび^び地^ちの^の昆^こ蟲^もと
 誓^{ちか}約^ひを^をむ^むす^すび^びまた^{また}弓^{ゆみ}箭^やを^をり^り戦^{いくさ}争^{そう}を^を全^{ぜん}世^せ界^{かい}より^{より}の^のろ^ろき^き彼^{かれ}ら^らを^をあ
 て安^{やす}ら^らる^るあ^あ居^をあ^あむ^むべ^べし^しな^なわれ^{われ}汝^{なんぢ}を^をめ^めど^どり^りて永^{とこ}遠^{しほ}に^にい^いたら^{らん}公^{たう}義^ぎ
 と公^{こう}平^{へい}と寵^{いづくしみ}愛^{あい}と憐^{あは}憫^{れみ}とを^をも^もてあ^あん^んぢ^ぢを^を娶^{めと}り^りふ^ふの^のろ^ろき^きあ^ある^るこ^ことあ^あき^き眞^ま
 實^{こゝろ}を^をも^もて汝^{なんぢ}を^をめ^めど^どる^るべ^べし^し汝^{なんぢ}エ^エホ^ホバ^バを^をあ^あら^{らん}ニ^ニエ^エホ^ホバ^バい^いひ^ひ給^{たま}ふ^ふろ
 の^の日^{にち}わ^わき^き應^{こた}へ^へん^んわ^われ^れに^に天^{てん}あ^あこ^こた^たへ^へ天^{てん}の^の地^ちに^にこ^こた^たへ^へ三^{さん}地^ちの^の穀^{こく}物^{もつ}と

酒と油とに應へまた是等のもののエズレルに應へん
三我わがた
めにうれを地あまき憐まれざりし者をあわれみわが民あらざり
し者にむかひて汝わが民ありといはんかれらは我にむかひて
汝わが神ありといとん

一エホバわれに言給ひけるに汝ふたとび往てエホバを愛
せらるる子ども轉て同うのもろくの神にむかひ葡萄の菓子に愛
するイスラエルの子孫のごとくろのつれろふものお愛せらるれ
ども姦淫をおこるふ婦人をあいせよ二われ銀十五枚おはむぎ一
ホメル半をもてわが爲にろの婦人をえたり三我これにいひける
は汝おはくの日わがためおとまりて淫行をあすことなく他の
人にゆくことあかれ我もまた汝にむかひて然せん四イスラエル
の子輩の多くの日王あく君あく犠牲あく表柱あくエホバあくテ
ラビムあくして居ん五ろの後イスラエルの子輩のかへりてろの

神エホバとろの王ダビデをたづねもどめ末日にをのゝきてエホ
バとろの恩恵とにむかひてゆかん

イスラエルの子輩よエホバの言を聴けエホバこの地に
住る者と争辨たまふ其の此地に誠實あく愛情あく神を知る事
あければあり二たゞ誣ひ偽り凶殺盗み姦淫のみあして互お相襲
ひ血血につぎ流る三ふのゆるにろの地うれひあまづみ之あす
むものみな野のけもの空のとりどもおあどろへ海の魚もま
た絶へてん四さきと何人もあらろふべうらすいましむ可らず汝
の民の祭司と争ふ者の如くあきり五汝は晝つまづき汝と偕なる
預言者の夜つまづらん我なんちの母を亡ぼせしわが民の知
識あきふよりて亡ぼさるあんち知識を棄るふよりて我もまた汝
を棄てわが祭司たらしめし汝おのが神の律法を忘るふよりて
我もあんちの子等をわすれん七彼らに大あるおしたぐひてやす

我われお罪つみを犯をせむ我われかれらの榮さかを辱はれんハ彼かれらのわの民の
 罪つみをくらひ心こころをたむけてるの罪つみををかすを願ねがへりたのゆゑ
 に民たみの遇あふところの祭司さいしもまた同おなじわをるれ途みちをたれらにきた
 らせるの行ぎ爲なをもて之これにむくゆべし十のさらの食くらへども飽あす淫いん
 行ぎをなせどもろの數かずよさずろの心こころをエホバにとむるふとを止やめ
 ばなり十二淫いん行ぎと酒さけと新あらしき酒さけの人の心こころをうばふ十三わが民たみ木き
 にむかひて事ことをとふろの杖つゑかれらお事ことをしめす是これうれら淫いん行ぎの
 靈たまあまよひささるれ神かみの下したを離はなれて淫いん行ぎを爲なすあり十三彼かれらの山やま
 々の巔したおて犧いけ牲にを獻さげ岡おかの上うへにて香かうを焚たき橡かし樹のき楊やなぎ樹のき栗くり樹のきの下したに
 てふの事ことをおこるふ此このろの樹こ蔭かげの美うしきふよりてありこゝを
 もてなんちらの女子むすめと淫いん行ぎををしあんちらの兒こ婦つまの姦かん淫いんを
 あふ十四我われなんちらのむすめ淫いん行ぎををしあんちらの罰せつせずあんちらの兒
 婦めのんいんをおこるへども刑つみせじ其そののあんちらもまづから離はなれ

ゆきて妓女おそめとふもに居をり淫婦いんめとふもお獻物さげものをろあふればあり悟さと
 らざる民たみはほろぶべし十五イスラエルよ汝い淫いん行ぎををしすともエダに
 罪つみを犯をさする勿なきギルガルに往ゆあかれベテアベンに上のるあを
 エホバの活いくど曰いて誓ちかふあかきイスラエルの頑強かたくなある牛うしのこ
 どくお頑強かたくなあり今いまエホバ羔羊かひつひをひろき野のにはあててるお如くして
 之これを牧よせん十七エフライムエフライムの偶ぐう像ざうにむすびつらあきりろの爲ためにま
 りせよ十八かれられ酒さけのくされかきらの淫いん行ぎのやまずかれらの楯たて
 とあるべき者等ものうの恥はを愛あいしいたく之これを愛あいせり十九かれの風かぜの翼つばさに
 つまられりれらろの禮物そくものによりて恥辱はをかうむらん
 二十祭司等さいしうよこれこれを聴きけイスラエルイスラエルの家い家いよ耳みみをうたむけよ
 王わうのいへよ之これにふてろを注そよさばさの汝等なんぢらにのろまんろのあん
 ちらのミズバミズバお設まるる歸かへタボルタボルに張はる網あみれどくなきをあり二十悖もと
 逆者さかのふりく罪つみあしづみたり我われかれらをこゝく懲こらしめん三

我^{われ}はエフ^エライム^{ライム}を知るイスラエル^{イスラエル}はわれに隠^{かく}るところ無しエ
フ^エライム^{ライム}よあんぢ^{あんぢ}今^{いま}すでに淫行^{いんかう}をなせりイスラエル^{イスラエル}のすでに汚^{けが}
きたり四^よかきらの行爲^{おこなひ}をきらしめてその神^{かみ}お歸^{かへ}ること能^{あた}はざら
しむろの淫行^{いんかう}の靈^{れい}の裏^{うち}にありてエホバ^{エホバ}を知ることをあけをばあ
り五^ごイスラエル^{イスラエル}の驕傲^{けうごう}の面にむかひて証^{あかし}をなしろれ罪^{つみ}によ
りてイスラエル^{イスラエル}とエフ^エライム^{ライム}は仆^{たふ}れユダ^{ユダ}もまた之^{これ}ともになふ
きん六^{ろく}かれらの羊^{ひつじ}のむれ牛^{うし}の群^{ぐん}をたづさへ往^{ゆき}てエホバ^{エホバ}を尋求^{たづねもとめ}め
ん然^{しか}ぞあふふとあらじエホバ^{エホバ}既^{すで}にかきらより離^{はな}れ給^{たま}ひたれをな
り七^{しち}かきらエホバ^{エホバ}にむかひ貞操^{めいそう}を守^{まも}らずして他人^{ただしひと}の子^こを産^{うめ}り新^{あらた}
月^{げつ}かれらどろの産業^{さんごふ}とをともお滅^{めつ}ぼさん八^{はち}あんぢらギベア^{ギベア}あて
角^{かく}をふきラマ^{ラマ}にてラツバ^{ラツバ}を吹^{ふき}あらしべテアベン^{アベン}にて呼^よりて言^い
へベニヤミン^{ベニヤミン}よあんぢれ後^{あと}にありと九^く罰^{つみ}せらるるは日にエフ^エラ
イム^{ライム}は荒廢^{あられ}れん我^{われ}イスラエル^{イスラエル}の支派^{しはい}の中^{うち}おのならず有^あるべきあ

とを示^あせりナ^ナユダ^{ユダ}の牧伯^{まきはく}等^{らう}の境界^{さかい}をうつすものゝごとくあれり
我^{われ}わが震怒^{いかり}を水^{みづ}のごとくに彼^{かれ}らのうへに斟^そぐん十二^{じふに}エフ^エライム^{ライム}の
甘^{あま}んじて人のさだめたるところに従^{したが}ひあゆむおゆるに轡^{さなえ}をうけ
て虐^{あへた}げられ壓^{おさ}えん十三^{じふさん}われエフ^エライム^{ライム}に之^{これ}靈^{れい}のごとくユダ^{ユダ}の家^{いへ}
に腐^{くさ}朽^くのごとし十三^{じふさん}エフ^エライム^{ライム}おのきに病^{やまひ}あるを見^みユダ^{ユダ}おのき
に傷^{きず}あるをきたり斯^かてエフ^エライム^{ライム}のアッスリア^{アッスリア}に往^ゆきヤレブ^{ヤレブ}王^{わう}
に人^{ひと}をつかひしたれを彼^{かれ}はあんぢらを醫^いすあをえす又^{また}あんぢ
らの傷^{きず}をのりきさることを得^えざるべし十四^{じふしよ}わきエフ^エライム^{ライム}には獅^し
子^しのごとくユダ^{ユダ}の家^{いへ}にわかき獅子^{しし}のごとし我^{われ}しも我^{われ}の抓^{かき}剪^{きり}て
さり掠^{かす}めゆけども救^{すく}ふ者^{もの}あかるべし十五^{じふご}我^{われ}ふたゝびわが處^{ところ}にへ
りゆき彼^{かれ}らぶろの罪^{つみ}をくいてひたすらじが面^{かほ}をたづね求^{もと}むるま
で其^{その}處^{ところ}おをらん彼^{かれ}らの艱難^{がいなん}によりて我^{われ}をたづねもどむることを
せん

第一章 一 來れわきらエホバにかへるべしエホバわれらを抓劈た
まひたきどもまた醫そふとをあし我儕をうち給ひたきどもまた
ろの傷をつゝむふとを爲したまふ可きむありニエホバの二日の
のちわれらを活かへし三日あわれらを起せたまはん我らるの前
あて生ん三この故にわれらエホバを忘るべし切ふエホバを知る
ことを求むべしエホバの晨光のごとく必ずあらはれいで雨のご
とくわきらあのみ後の雨のごとく地をうるはし給ふ四エフラ
イムよ我あんち何をあさんやユダよ我あんち何をあさんや
あんちの愛情のあしたの雲のおどくまたたきあきゆる露のご
とし五このゆゑにわれ預言者等をもてかれらを撃ちわが口の言
をもてかれらを殺せりわが審判のあらえきいづる光明のごとし
六われの愛情をよろこびて犠牲をよろこぶ神を忘るを悦ぶと
と燔祭あまされり七然るお彼らはアダムののごとく誓をやぶりの

してふて不義をわれにおてあへり八ギレアデの惡をおてあふも
のゝ邑おして血の足跡のなかに徧した祭司のともがらは山賊
の群れのごとくあたまちして人をろこみひシケムに往く大路あて
人をろす彼等のあくのごとき惡きことをおてあへり十わきイ
スラエルのいへお憎むべきことあるを見たりりの處にてエフラ
イムの淫をおてなふイスラエルの汚たり十二ユダよ我わが民の俘
囚をかへさんときまた汝のためおも穫刈をろあへん
第七章 一 われイスラエルを醫さんときエフライムの愆とサマリ
アのあしきわざと露のるかれらの詐詭をおてあひ内に偷盗い
るあり外おは山賊のむれ掠めざるありニかれら心あわがろの一
切の惡を忘れたためたることを思えず今ろの行爲のかれらを圍み
ふさぎて皆お目前おありニかれらろの惡をもて王を悦むせ
ろの詐詭をもてもろくの牧伯を悦べせり四かれらのみる姦

淫をとおこなふ者おしてパンを作るものお焼るゝ爐のごとし捏粉
をこねてろの發酵ときまであをらく火をおこすことをせざるの
とあり五わきらの王の日あもろゝの牧伯の酒の熱およりて疾
王は嘲けるものどもに手を伸ふ六かれら伏伺するほどに心を
爐のごとくして備をあするのパンを焼くもの終夜ねむりあつ
き朝におよべばまた煩のごとく燃ゆ七あれらのな爐のごとく
に熱してろの審士をやくろのもろゝれ王のみあ侍るかきらの
中に我をよぶもの一人だあしハエフライム八の異邦人にいり
まじるエフライムにかへさざる饅餅とあれり九かき他邦人ら
あろの力をのぶるきども之をあらす白髪十の身に雜り生れども
あきをさとりす十一イスラエルの驕傲のろの面にむひて証をあ
すかきらは此もろゝの事あれどもろの神エホバに歸ることを
せず又もとむることをせざるあり十二エフライムの智慧なくして

愚なる鵠のごとし彼等はエジプトにむひて呼求めまたアッス
リアに往く十三我あきらの往ときわが網をろの上にはりて天空の
鳥のごとくに引墮し前あろの公會お告しおどくかきらを懲あめ
ん十四禍あるああれらの我をいなれて迷ひいでたり敗壞かきら
はきたらんかきらの我にむひて罪ををかしたり我かれらを贖
いんとおもへどもかれら我あさからひて謊言をいへり十五かきら
誠心をもて我をよばず唯牀にありて哀號べりあれらの穀物とあ
たらしき酒のゆゑをもて相集りかつわきに逆らふ十六我うれらを
教へろの腕をつよくせしあども彼らのわきあもとりて惡きこと
を謀る十七あきらの歸るさきども至高者にうへらず彼らのたのそ
おたき弓のごとし彼らのもろゝの牧伯のろの舌のあらき言に
よりて劔にたふれん彼らの之がためにエジプトの國にて嘲笑を
うくべし

家^いにのふめりこの民わが契約^{けいやく}をやふりわが律法^{りつぽう}を犯しよよる
ニあきら我^{われ}にむかひてわが神^{かみ}よわきらイスラエル^{いすらえ}のなんぢを知^し
きりと叫^{きこ}ばんミイスラエル^{いすらえ}の善^{ぜん}をいさきらへり敵^{てき}これを追^おん
かれら王^{わう}をたてたり然^{しか}きども我^{われ}よりて立^たしにあらすうきら牧^き
伯^みをたてたり然^{しか}きども我^{われ}がきらざるどころあり彼^{かれ}らまたろの金^{きん}
銀^{ぎん}をもて己^{おの}がために偶像^{ぐわう}をつくれりろの造^{つく}るの毀^くちすてらき
んが爲^{ため}あせしにことあらず五^ごサマリア^{さまりあ}の犢^{こし}は忌^いきらふ
べきものありとが怒^{いかり}あきらあむかひて燃^もゆあれら何^い色の時^{とき}にか
罪^{つみ}なきにいたらん六^{ろく}この犢^{こし}のイスラエル^{いすらえ}より出^いづ匠^{たくみ}人のつくれ
る者^{もの}あして神^{かみ}ああらすサマリア^{さまりあ}の犢^{こし}のくだけて粉^{こな}とあらん七^{しち}か
きら風^{ふう}をよきて狂^{きやう}風^{ふう}をありとらん種^{くさ}どころの生長^{せいじやう}る穀^{こく}物^{ぶつ}あく
ろの穂^ほのみのらざるべしたとひ實^みるども他^た邦^{ほう}人^{ひと}これ呑^のんハイ

スラエルの既^{すで}に呑^のきたり彼^{かれ}等^らいま列^{れつ}國^{こく}の中^{うち}において悦^{よろこ}ぶれざ
る器^{うつは}のごとく頑^{がん}傲^おするとあり九^く彼^{かれ}ら獨^{ひとり}るし野^のの驢^ろ馬^ばのごとくア
フスリア^{あすりあ}おゆけりエフライム^{えふらいむ}の物^{もの}を餽^くりて戀^{こひ}人^{ひと}を得^えたり十^{じゅう}かれ
ら列^{れつ}國^{こく}の民^{たみ}あ物を餽^くりたりと雖^{なほ}も今^{いま}われ彼^{かれ}等^らをつとへ集^あむ彼^{かれ}ら
の諸^{しよ}侯^{こう}伯^{はく}の王^{わう}に負^おせらるゝ重^{おも}擔^{たん}のためあ哀^{あは}れ始め^{はじ}めん十二^{じふに}エフライ
ムは多くの祭^{さい}壇^{だん}を造^{つく}りて罪^{つみ}を犯^かすこの祭^{さい}壇^{だん}のかきらが罪^{つみ}に陷^おる
楷^{こし}といあれり十三我^{われ}うれらのために律^{りつ}法^{ぽう}をえりして數^{あまた}件^{けん}の箇^{かん}條^{じょう}を
示^{しめ}したきと彼^{かれ}らと反^{はん}て之^{これ}を異^{あや}物^{ぶつ}とおもへり十三かれら我^{われ}に献^{けん}ふ
べき物を献^{けん}ふきども只^{ただ}肉^{にく}をろあへて己^{おの}づから之^{これ}を食^くふエホバ
の之^{これ}を納^なたまひす今^{いま}かれらの愆^{とが}を記^{おぼ}え彼^{かれ}らの罪^{つみ}を罰^{ばつ}えたまひん彼^{かれ}
らのエジプト^{えじぷと}に歸^{かへ}るべし十四イスラエル^{いすらえ}の己^{おの}が造^{つく}りし主^{ぬし}を忘^{わす}れてもろ
もろの社^{やしろ}廟^ぼを建^たてユダ^{よだ}の塹^{さき}をとりまひせる邑^{まち}を多く増^ふし加^{くわ}へた
り然^{しか}きわ火^ひをろの邑^{まち}々^々あおくりて諸^{しよ}の城^{しろ}を燒^や亡^{ぼう}さん

イスラエルよ異邦人のごとく喜びすさむ勿きあんち淫
行をゐして汝の神を離る汝すべての夢の打場にて賜はる淫行の
賞賜を愛せりニ打場と酒酔といかれらを養ひ亦あたらしき酒
もむあしくあらんニあれらハエホバの地にとまらずエフライ
ムハエジプトに歸りアツオリアにて汚穢たる物を食はん四彼等
ハエホバにむかひて酒を灌ぐべき者にあらずの祭物のエホバ
の悦びたまふ所にあらずかれらの犠牲ハ喪に居ものパンの
とし凡ててきを食ふもの汚るべし彼等のパンハ只おの食ふ
ためにのみ用るべくしてエホバの家ハ入るべきあらず五なん
ちら集會の日とエホバの節會の日ハ何をあさんとするや六祢よ
かれら滅亡の故によりて去ゆきぬエジプトかきらをあつめメン
ヒスかれらを葬らん蒺藜かれら銀の寶物を獲いばら彼らの天
幕に蔓らん七刑罰の日きたり應報の日きたれりイスラエルこそ

を知らん預言者の愚なるもの靈に感じたるものハ狂るものあり是
なんちの惡おほく汝の怨恨おほいなるに因るハエフライムハ我
ガ神にあらべて他の神をも侍望めり預言者の一切の途ハ鳥を捕
ふる者の網のごとく且ろの神の室の中おて怨恨を懷けり九か
らハギベアの日のごとく甚だしく惡き事を行あへりエホバハ
の惡をこゝろに記てろの罪を罰したまはん十在昔われイスラエ
ルを見ること荒野の葡萄のごとく汝らの先祖等を看るゑど無花
果樹の始にむすべる最先の果のごとくなし十一に彼等ハバアル
オルにゆきて身を恥辱にゆだねろの愛する物ととも憎むべき
者といわれり十二エフライムの榮光ハ鳥のごとく飛さらん即ち産
ことも孕むこども妊娠こどもありるべし十三假令かれら子等を育
るとも我ろの子を喪ひて遺る人あきにならえめん我ガ離るゝ
時うれらの禍大いある哉十三われエフライムを美地ハ植てツロの

ごとくあしゝかゞもエフライムの子等を携へいだして人を
殺す者お付さんどす^{十四}エホバよ彼らに與へたまへ爾るにを與へ
んとしたまふや孕まざる胎と乳あき乳房とを與へたまへ^{十五}かれ
ら凡の惡いギルガルにあり此故に我かしゐにて之を惡めりろ
の行爲あしければ我が家より逐いだし重て愛することせじろ
の牧伯等はみる悖れる者あり^{十六}エフライムの撃さるの根いかれ
て果を結ぶまじ若し産ことあらば我らの胎ある愛しむ實を殺さ
ん^{十七}われら聽從いざるによりて我が神ふれを棄たまふべしかれ
ら^{十八}列國民のうちあ流離人どあらん

第十一章

イスラエルの果をむすびて茂り榮る葡萄の樹の果の
多くあるがまゝに祭壇をましろの地の饒あるがまゝあ偶像を
美しくせり^二あれらの二心をいだけり今かゝら罪せらるべし神
はろの祭壇を打毀ちろの偶像を折棄たまはん^三かれら今いふべ

し我儕神を畏れざりしに因て我らに王あしこの王とわれらのた
めに何をかゝさんど^四かれらの虚しき言をいだし偽りの誓を
して約をたつ審判の畑の畝にもえいつる茵蔯のごとし^五サマリ
アの居民いベテアベンの犢の故によりて戦慄あんの民とてを
を悦ぶ祭司等の榮のうせたるが爲にあげかん^六犢の^七アッス
リアに携へらる禮物としてヤレブ王に獻げらるべしエフライム
の羞をあらむりイスラエルのあ計議を恥ん^七サマリアのは
ろびろの王の水のうへの木片のごとし^八イスラエルの罪あるア
ベンの崇邱の荒れて^九荆棘と蒺藜の壇のうへにえ茂らんろ
の時あきら山にむゐひて我等をおほへ^十陵にむゐひて我儕のうへ
に倒さよといはん^{十一}イスラエルよ汝のギベアの日より罪をを
せり彼等いろくに立り邪惡のひと^{十二}を攻たりし戦争のギベア
にてあきらあ及ばざりき^{十三}我思ふまゝに彼等をいましめん彼等

ろの二の罪につみられん時よろの民あつまりて之をせめん
 エフライムの馴さをたる牝牛のおどくあして穀をふむふとを
 好むされど我ろの美しき頸に物を負しむべし我エフライムあ
 をりけんユダの耕しヤコブの土塊をくだかんなんちら義を生
 ずるために種をまき憐憫にしたがひてりとり又新地をひらけ
 今エホバを求むべき時あり終にはエホバきたりて義を雨のこ
 とく汝等のうへあ降せたまへんなんちらの惡をたぶへし不義
 を穫をさめ虚偽の果をくらへりこの汝等のれの途をたのま己が
 勇士の數衆をたのめるに縁さこの故にあんちらの民のなかあ
 亂あこりて汝らの城のことく打破られんシャルマンの戰鬥
 の日にベテアルベルを打破りしにことならず母ろの子どもに
 碎かえたりまあんちらの大ある惡のゆゑによりてベテル如此
 んちらに行あへるありイスラエルの王のあしたあ滅ん

第十一章

ーイスラエルの幼かりしとき我これ

を愛しぬ我わぶ子

をエジプトより呼びだしたりニかれらに呼るゝに隨ひていよい
 よろの呼者あ遠ざかり且もろくのバアルあ犠牲をささげ厭た
 る偶像に香を焚りニわれエフライムに歩むふとををしへ彼等を
 わが腕あおのせて抱けり然どあきらめ我にいやさをたるを知す
 われ人にもちある索すあち愛のつなをもて彼等をひけり我あ
 かれらを待ふの軌をろの腮より擧のくるものごとくにして彼
 等に食物をあたへたりニかれらにエジプトの地にかへらじ然と
 かきらぶエホバに歸らざるによりてアッスリア人ろの王となら
 ん六劍かきらの諸邑あまのりゆきてろの關門をこぼち彼らをろ
 の謀計の故によりて滅ぼさん七わぶ民のともすれば我あはるを
 んとする心あり人あれを招きて上に在るものに屬しめんとす
 ども身をおてすもの一人だにあしハエフライムよ我いかで汝を

すてんやイスラエルよ我いかで汝をわたさんや我いかで汝をア
デマのごとくせんや争であんちをせボイムのごとく爲んやわが
心わが衷にかゝりて我の愛憐ふとく燃あこきり我わが烈
しき震怒をほどもすことをせし我かさねてエフライムを滅そこ
とをせし我の人にあらず神あきばあり我の汝のうちにいます聖
者ありいかりをもて臨まじあれらの獅子の吼るごときに聲を
出したまふエホバあ随ひて歩まんエホバ聲を出したまへバ子等
の西より急死來らんエシブトより鳥のごとくアツスリ
アより鴿のごとくに急ぎ來らん我かれらをろの家々に住めしむ
べし是エホバの聖言ありエフライムの謊言をもてイスラエル
の家計偽をもて我を圍めりユダの神と信ある聖者どに屬みつ
かずみ漂蕩をれり

第二十二

エフライム

の風をくらひ東風をおひ日日お詐偽と暴

逆どを増くはへアツスリアと契約を結び油をエシブトに餽せり
ニエホバのユダと争辨をあしたまふヤコブをろの途お志たむひ
て罰しろの行爲にしたがひて報いたまふエホバの胎あぬし時
ろの兄弟の踵をとらへまた己ぶ力をもて神と角力あらうへり
あれん天の使と角力あらうひて勝あきて之に恩をもとめたり彼
のベテルあて神にあへり其處にて神われらに語ひたまへり
をん萬軍の神エホバありエホバの其記念の名あり然るに
の神にかへり矜恤と公義とをよみ恒あんなちの神を仰ぐべし
セ彼のカナン人(商賈)ありろの手に詭詐の權衡をもち好であさむ
き取てとをあすハエフライムのいふ誠にわれに富る者どあれり
我の身に財寶をえたり凡てわが勞したることの中お罪をうべき
不義を見いだす者あかるべし我エホバのエシブトの國をいで
しより以來あんなちの神あり我いまも尙あんなちを幕屋あすま

せて節會の日のごとくあらしめん。我もろくの預言者かたり
 り又これお益々お同く異象をしめしたり我もろくの預言者お
 托して譬喩をようく。ギレアデの不義ある者あらずや彼らの全
 く虚しかをらのギルガルにて牛を犠牲お献ぐかれらの祭壇の圍
 の畝あつゝたる石の如し。ヤコブの野おにげゆけり。イ
 スラエルの妻を得んために人お事へ妻を得んためお羊を收り。エ
 ホバ一人の預言者をもてイスラエルをエジプトより導きいだ
 し一人の預言者をもて之を護りたまへり。昔エフライムの怒を激
 ふること極めておはだしろの主あれが流し血をかれが上にと
 めろの恥辱をあれに歸らせたまはん。

一 エフライム言を出せば人をれけり。彼はイスラエルの
 のあるに己をたかりし。パールおより罪を犯して死たりしが。今
 も尙ます。罪を犯しろの銀をもて已のため像を鑄ろの機巧

おした。ダビて偶像を作る。是を工人の作あるなり。彼らの之につ
 きていふ犠牲を獻ぐる者。この贖お吻を接べし。三。是によりて
 彼らの朝の雲のどく速おきえうする露のどく打場より大風
 お吹散さる。穀穀のどく窓より出ゆく煙のどくならん。四。さ
 れど我のエジプトの國をいでより以來あんちの神エホバあり
 爾われの外お神を知こと。おし我のほかに救者おし。五。我さきに荒
 野にて水あき地おて爾を顧みたり。六。かをらの秣場によりて食お
 飽き飽およりて。ろの心たかふり。是およりて我を忘たり。七。斯る
 おゆゑに我あれらお對ひて獅子のどく。途の傍にひろさう
 おがふ豹のどく。あらん。八。わを子をうしあへる熊のどく。彼ら
 に向ひて。ろの心膜を裂き獅子のどく。これを食べん。野の獸これ
 を攔断るべし。九。イスラエルよ。汝の滅ぶるは。我お背き汝を助くる
 者に背ぶ故なり。十。汝のもろくの邑お汝を助くべき。汝の王の今

いづくにかあるなんぢららの王と牧伯等とを我お與へよと言
たりし士師等^{さしきびと}の今いづくにゐある^{いま}十二われ怒^{いかり}をもて汝に王を與
へ憤恨^{いきどほり}をもて之^{これ}をうばひたり十二エフライムの不義の包^つまれてあ
りろの罪^{つみ}をさめたくはへられたり十三勛勞^{いきのくるしみ}あかきる婦のあ
しみ之お臨^{のぞ}まん彼^{かれ}の愚^{おろか}ある子^こあり時^{とき}お臨^{のぞ}まてもなほ産門^{さんもん}に入^いら
ず我^{われ}かれらを陰府^{えんぷ}の手より贖^{あがな}はん我^{われ}うきらを死より贖^{あがな}はん死よ
あんぢの瘡^{なやみ}は何處^{いづ}ああるの陰府^{えんぷ}よあんぢの災^{わざしひ}之何處^{いづ}あるか悔^あ
改^{あらため}めうくきて我^{われ}が目^めおみえず十五彼^{かれ}の兄弟^{きやうだい}のあかあて果^みを結^{むす}ぶこ
と多^{おほ}けきども東風^{ひがしのかぜ}吹^ふきたりエホバは息^{いき}荒野^{あらの}より吹^ふおらん之^{これ}が
ため^{ため}にろの泉^{いづみ}は乾^ひろの源^{みなもと}は涸^{かわ}んろの積蓄^{つみたて}はへたるもろくの寶^{たから}
貴器^{きき}皿^はは掠^{さら}め奪^{うば}へるべし十六サマリアはろの神^{かみ}にろむきたきを刑^つ
せられ劍^{つるぎ}お斃^{たふ}せんろの嬰兒^{あやなこ}のあげくだかれろの孕^{はつみ}たる婦^{をんな}の割^され
ん

イスラエルよ汝の神エホバに歸^{かへ}れよ汝の不義のため
に仆^{たふ}れたりニ汝^{なんぢ}ら言^{こと}詞^ををたづさへ來^きりエホバお歸^{かへ}りていへ諸^{もろ}の
不義^{ふぎ}の赦^{ゆる}して善^{よき}どころを受^{うけ}納^{いれ}たまへ斯^{しか}て我^{われ}らの唇^{くちびる}をもて牛^{うし}のこ
とくに汝^{なんぢ}に獻^{ささ}げん三アッスリアのわれらを援^{たすけ}じ我^{われ}らの馬^{うま}に騎^{のり}じ
またふたたび我^{われ}等^らみづのらの手^ておて作^{つく}る者^{もの}にむかひどぶ神^{かみ}な
りと言^いひ孤兒^{みなしこ}と爾^{なん}によりて憐憫^{あはれみ}を得^うべければありと四我^{われ}のそら
の反逆^{さむぎ}を醫^いし悦^{よろこ}びて之^{これ}を愛^{あい}せん我^{われ}が怒^{いかり}のれを離^{はな}れ去^さたり五我^{われ}
イスラエルお對^{たい}しての露^{つゆ}のおどくらん六ろの枝^{えだ}の茂^{さか}りひろがり其^{その}美^{うつく}
さきレバノンのごとく根^ねをいらん六ろの枝^{えだ}の茂^{さか}りひろがり其^{その}美^{うつく}
麗^{はしき}の橄欖^{かんらん}の樹^きのごとくろの芬芳^{かうわしき}とレバノンのごとくならん七ろ
の蔭^{かげ}お住^すむ者^{もの}かへり來^きらんうれらの穀物^{こくぶつ}の如^{ごと}く活^{いき}うへり葡萄樹^{ぶどうのき}
のごとく花^{はな}さきろの馨香^{かうわしき}のレバノンの酒^{さけ}のごとくなるべし八エ
フライムといふ我^{われ}また偶^ぐ像^{ざう}と何^{なに}のあづかる所^{ところ}あらんやと我^{われ}これ

に應へたり我かきを顧えん我は蒼翠の松のごとし汝われより果
を得ん九誰か智慧ある者ろの人はこの事を曉らん誰か頓悟あ
る者ろの人の之を知んエホバの道に凡て直し義者の之を歩む
然と罪人之之に躓かん

何西阿書 終

約耳書

一 ベトエルの子ヨエルに臨めるエホバの言ニ老たる人よ
汝ら是を聴けすべて此地に住む者汝ら耳を傾けよ汝らの世ある
の汝らの先祖の世にも是のごとき事ありしや三汝ら之を子に語
り子のまた之をろの子に語りろの子之を後の代に語りつたへよ
四 喰くらふ蝗虫の遺せる者の群ある蝗虫のくらふ所とありろの
遺せる者のあめつくすあめねむしのくらふ所とありろの遺せる者
の喰はるばす蝗虫は食ふ所とあり五 酔る者よ汝ら目を醒して
泣けすべて酒をのむ者よ哭きさけべあたらしき酒あんちらの口
を絶えたきをあり六 ろのことなる民わが國に攻よすればありろ
の勢ひ強くろの數のかられろの齒と獅子の齒のごとくろの牙
の牝獅子の牙のごとし七 彼等わが葡萄の樹を荒し且が無花果の
樹を折りろの皮をえぎはだかにして之を棄めろの枝白くあるをり

ハ汝ら哀哭なげきかゝしめ貞女ていぢよの若わかかりしときの夫おとこのゆゑお麻布あしふを腰こしあまどひて哀哭なげきかゝしむぐごとくせよ素祭そさい灌祭くわんさいともおエホバの家いへに絶たえエホバに事つかふる祭司さいし等ら哀傷かなしみをなす十田はたの荒あれ地ちの哀傷かなしみむ、是穀物こくぶつ荒あれて新あらしき酒さけつき油あぶらたえんとすればあり十二こむぎ大おほむぎの故ゆゑをもて農夫のうふ羞はぢよ葡萄ぶどうつくり哭なげよ田はたの禾稼かりうせえてたをむあり十二葡萄樹ぶどうのきは枯いち無花果樹いちじくのきは萎おし石榴椰子林檎ざくろりんごおよび野のの諸すての樹きの凋おみたり是こをもて世よれ人の喜よろこ樂しみのきうせぬ十三祭司さいしよ汝ら麻布あしふを腰こしにあまどひてあきかゝしめ祭壇さいだんに事つかふる者ものよ汝らなきさけべ神かみの事つかふる者ものよあんなら來り麻布あしふをよどひて夜よをすこせ、其その素祭そさいも灌祭くわんさいも汝らの神かみの家いへに入いることあられあればあり十四汝ら斷食だんじきを定め集會あひくわいを設まつけ長老等ちやうらうらうらを集あつめ國くにの居民きみんをことく汝らの神かみエホバの家いへを集あつめエホバにむゐひて號呼ごうこれよ十五あゝろの日ひの禍わざはひあるうゐエホバの日ひ近く暴風はやちのごとくお全能者ぜんのうしやより來

らん十六我らぶまのあたりお食物絶あつくせんしにあらずや我らの神の家いへお歡喜よろこと快樂たのしみ絶たしおあらずや十七種かみの土つちの下したに朽くち倉くらの壞やぶを廩いんの圯やるる穀物こくぶつほろぼされたればあり十八いゝお畜獸けものは哀かなみ鳴なや牛うしの群ぐんと亂みだれ迷まよふ草くさあけきむあり十九羊ひつじの群ぐんもまた死喪しさうん二十エホバよ我らなんぢに向むかひて呼よべらん荒野あひらの諸すての草くさの火ひおて焼やけ野のの諸すての樹きの火ひ焰えんにてやけつくきむあり二十野のの獸けものもまた汝らむかひて呼よべらん、其その水みづの流ながれ涸かわれてあききむ草火くさひにてやけつくればあり二十三鳴なせ國くにの民たみみお慄おそひとあゝあんなろいエホバの日ひきたらんとすきばありすでお近ちかづけり二十四この日ひの黒くろくをぐらき日ひ雲くもむらがるまぐらき日ひにして玄くろのうめの山々やまにたあびくが如ごとし數かずおはく勢いきほひさあんなる民たみむれいたらんあゝる者もののいにしへよりありしことあるのちの代々よの年としにもあることあるべし三火ひ彼らかれらの前まへを焚やき

火の焰のれらの後にもゆるの過ぎる前と地エデンのごとくろの過
 しのちの荒はてたる野の如し此をのがれうるもの一としてある
 ことありし四彼らの状の馬のあたちのごとく其馳ありくことと軍
 馬のごとし五ろの山の嶺にとびをゆる音の車の轟聲のごとし
 た火の稗株をやくちのごとくしてろの様強き民の行伍をたて
 戦陣にのろむ似たり六ろのむかふところ諸民戦慄ろの面み
 る色を失ふ七彼らの勇士のごとくに趨あるき軍人のごとくに石
 垣に攀のぼる彼ら各々あのだ道を進みゆきてろの列を亂さず八
 彼ら互に推あひず各々ろの道にしたがひて進み行く彼らに刃に
 觸るるとも身を害ひず九彼らの邑をかけめぐり石垣の上ひ奔り家
 に攀登り盜賊のごとくお窓より入る十ろのむかふところ地ゆる
 ぎ天震ひ日も月も暗くあり星ろの光明を失ふ十一エホバろの軍勢
 の前にて聲をあげたまふ其軍族のなだ大あるべきあり其言を爲

とぐる者の強しエホバの日の大にして甚だ畏るべきが故に誰か
 これに耐るあどを得んや十二然とエホバ言たまふ今おても汝ら斷
 食と哭泣と悲哀とをなし心をつくして我に歸き十三汝ら衣を裂す
 して心を裂き汝等の神エホバに歸るべし彼の恩恵あり憐憫あり
 かつ怒るあどゆるく愛憐大おして災害をあるすを悔たまふなり十四
 誰あ彼のああるひに立歸り悔て祝福をろの後にとめのこし汝らを
 して素祭と灌祭とをあるんちらの神エホバにさしげしめたまはし
 と知んや十五汝らにオンにて喇叭を吹きあらし斷食を定め公會を
 よびつとへ其民を集めろの會を潔くし老たる人をあつめ孩童と
 乳哺子を集め新郎をろの室より呼びだし新婦をろの密室より呼
 いだせ十七而してエホバあ事ふる祭司等の廊と祭壇の間にて泣て
 言へエホバよ汝の民を赦したまへ汝の産業を恥辱しめらるゝあ
 任せ之を異邦人に治めさする勿れ何ぞ異邦人をして彼らの神の

何處にあると言ふべけんや。然せむエホバ己の地のためお嫉妬を起しろの民を憐れたまはん。エホバ應へてろの民に言たまへん。視よ我穀物とわたらしき酒と油を汝におくる汝ら之お飽ん我あんちらをして重ねて異邦人の中お恥辱を蒙らしめし。我北よりきたる軍を遠く汝らより離れあめうるはひあき荒地に逐やらん其前軍を東の海にろの後軍を西の海に入んろの臭味立ちろの惡嗅騰らん。是れ大なる事を爲たるお因る。三地上懼るる勿き喜び樂しめエホバ大なる事を行ふ。ひたまふあり。三野の獸よ懼るる勿れあれ野の牧草はもえいで樹の果を結び無花果樹葡萄樹の力をめぎすあり。三シオンの子等よ汝らの神エホバおよりて樂め喜べ。エホバの秋の雨を適當なんちらに賜ひまた前のおどく秋の雨と春の雨とを汝らの上お降せたまふ。三打場に穀物盈ち麴に。あたらしき酒と油溢さん。我お汝らお遣い。あし大軍する。あち

群ある蝗なめつくす蝗喫はるばす蝗噬くらふ蝗の蝕あらせる年を我汝らお賠のん。汝らの食ひ、食ひて飽きよのつねあらする。んちらを待ひたまひし汝らの神エホバの名をほめ願へん。我民はとこしへお辱しめらるることあるべし。三ろくて汝ら。イスラエルの中お我お居るを知り汝らの神エホバ。我のみにて外に無きことを知ん。我民之永遠に辱めしめらるるゝあかるべし。三ろの後わを吾靈を一切の人に注ぶん。汝らの男子女子は預言せん。汝られ老たる人は夢を見汝られ少き人の異象を見ん。元ろの日我またわぶ靈を僕婢お注がん。三また天と地に徴證を顯いさん。即ち血あり火あり煙の柱あるべし。三エホバの大なる畏るべき日の來らん。前に日暗く月血お變らん。三凡てエホバの名を願ふ者の救をるべし。ろはエホバの宣ひし如く。シオンの山とエルサレムとに救をる者あるべければあり其遺る者の中にエホバの召し給

へるものあらん
 第一 一 視よ我ユダとエルサレムの俘囚人を歸さんろの日ろの
 時ニ萬國の民を集め之を携へてヨシヤバテの谷にくだりかしこ
 にて我民我ゆづりの産あるイスラエルのために彼らをさばかん
 彼らこそを國々お散してろの地を分ち取りたればありニ彼らに
 籤をひきて我民を取り童子を娼妓お換へ童女を賣り酒お換て飲
 り四ツロエドンよベリエテのすべての國よ汝ら我と何れかよと
 りあらんや汝ら我おあしよとに返をあさんとするや若し我に
 返報をあさんどあらば我忽ち迅速お汝らおあしよとをもてろ
 の首に歸らしめん五是に汝らと我の金銀を取り我のしたふべき
 寶を汝らの宮にたづさへゆき六またユダの人とエルサレムの人
 をギリシア人に賣りてろの本國より遠く離らせたればあり七
 我かれらを起して汝らが賣たる處より出し汝らがあしよと

をもてろの首にかへらしめん八我のあんぢらの男子女子をユダ
 の人の手に賣り彼らは之を遠き民あるモバ人に賣らんエホバこ
 色を言ふ九もろくの國に宣つたへよ戦争の準備を爲し勇士を
 はげまし軍人をこどくちのより來らしめよ十汝等の劔を劍
 に打ちへ汝らの鎌を鎗に打かへよ弱き者も我の強しと言へ十二四
 周の國々の民よ汝ら急ぎ上りて集をエホバよ汝の勇士をあして
 お降したまへ十三國々の民よ起て上りヨシヤバテの谷に至る彼處
 に我座をしめて四周の國々の民をこどく鞫るん十三鎌をいそ
 よ穀物の熟せり來り踏よ酒搾の盈ち甕の溢る彼らの惡大あれを
 ありと十四かまびすしきかゝ無數の民審判の谷にありてうまびす
 しエホバの日審判の谷に近づくが故あり十五日も月も暗くあり星
 ろの光明を失ふ十六エホバモオンよりよびとるあしエルサレム
 より聲をはなち天地を震ひうごかしたまふ然とエホバの

民の避所イスラエルの子孫の城とありたまはんとて汝ら我
 はエホバ汝等の神にして我聖山シオンに住むことをしるべしエ
 ルサレムは聖き所となり他國の人の重ねてろの中をのよふまじ
 たるの日山あたらしき酒滴り岡に乳流れユダのもろくの河
 に水流きエホバの家より泉水流きいでしッテムの谷に灌ぎん
 子孫を虐げ幸ある者の血をろの國に流したればありさき色をユ
 ダと永久にすまひエルサレムは世々に保たんニ我さきあわれ
 らが流し血の罪を報いざりしを今これをもくいんエホバシ
 オンに住みたまはん

約耳書 終

西番雅書

第一章

一 アモンの子ユダの王ヨシヤの世にゼパニヤに臨めるエ
 ホバの言ゼパニヤの子クシの子クシのゲダリアの子ゲダリアア
 マリヤの子アマリヤの子ヒゼキヤの子ありニエホバ言たまふわ
 地の面よりすべての物をとらひのふかんニわき人と獸畜をはろ
 ぼし空の鳥海の魚および蹟礫にある者と惡人どを滅さん我あ
 らず地の面より人をはろぼし絶んエホバこれを言ふ四わきユダ
 とエルサレムの一切の居民との上に手を伸ん我此處よりかの漏
 のこれるパールを絶ちケマリムの名を祭司と與に絶ち五また屋
 上にて天の衆軍を拜む者エホバお誓を立て拜まなぐらも亦あ
 きの王を指て誓ふことをする者六エホバに悖り離るる者エホバ
 を求めず尋ねざる者を絶ん七汝主エホバの前に黙せよろいエホ
 バの日近づきエホバすでに犠牲を備へろの招くべき者をさだめ

たまひたればありハエホバの犠牲の日いへ我われもろくの牧伯と王わうの子等こらあよび凡て異邦の衣服ころもを着る者を罰すべしおころの日には我また凡て國をどびて強暴と詭譎をもて獲たる物をあのが主まぬの家いへあ満す者等を罰せんおこハエホバ曰たまひくろの日ひに魚の門より號呼さけれ聲こゑおこり下邑より喚く聲こゑおこり山々より大なる敗壞はろおこらんハマクテシの民よ汝ら叫べ其の商賣する民悉くはろは銀を擔ふ者悉く絶たさばありハろの時ときにわを燈ともしをもちてエルサレムの中を尋ねん而して滓の上に居着て心の中うちにエホバの福をさいはもあさず災をもあさずといふものを罰すべしハかれらの財寶たからを掠められ彼らの家いへ荒果んかはら家を造るともろの中に住ことを得ず葡萄を植るともろの葡萄酒を飲のことを得ざるべしハエホバの大なる日近づけり近づきて速かに來る聽よ是エホバの日ある予彼處に勇士のいたく叫ぶありハろれ日ひに忿怒の日患難あよ

び痛苦の日ひ荒かつ亡るの日ひ黑暗またをぐらき日濃き雲あよび黒雲の日ひ十六うつをふき鯨聲をつくり堅き城を攻め高き櫓を攻める日ひなりハわき人々に患難を蒙かむらせて盲者のどくに惑まどひあるかしめん彼らエホバあむかひて罪を犯したるをばあり彼らの血ちの流ながされて塵のどくありハら肉の捨られて糞土のおどくあるるべしハかきらの銀も金もエホバの烈はげき怒の日ひあいかきらを救ふことあたはず全地ぜんちの嫉妬の火ひに吞るべしハ即ちエホバ地の民をあとく滅はろふたまたそん其事ことをことハに速すみあるべしハ第一章 一 汝等羞恥を知ぬ民早く自ら内に省みよ二 夫日の糠粃のどく過ぎざる然さに詔言みことれいまだ行おこないざる先エホバの烈はげき怒のいまだ汝等に臨のぞみざる先エホバの忿怒の日ひのいまだ汝等あきたらざるさきに自ら省みるべし三 すべてエホバの律法を行ふ斯地の遜るものよ汝等エホバを求め公義を求め謙遜を求めよ然す

きて汝等エホバの忿怒の日に或は匿さるゝことあらん。四夫がザ
 と棄らるアシケロンは荒れてアシドドの白晝に逐はるはエク
 ロンの抜さらるべし。五海濱に住る者およびケレテの國民の禍あ
 るのな、ペリシテ人の國カナンよエホバの言あんちらを攻む我あ
 るちを滅して住者あきに至らしむべし。六海邊の必らず牧場とあ
 り牧者の洞あよび羊の牢ろくに在ん。七此地はユダの家の殘餘を
 る者に歸せん彼ら其處にて草飼ひ暮あ至きパアシケロンの家あ
 臥んろは彼らの神エホバのを顧みろの俘囚を歸したまふべ
 けれはありハ我すでにモアブの嘲弄とアンモンの子孫の罵詈を
 聞き彼らわが民を嘲り自ら誇りて之が境界を侵せしあり九
 是故に萬軍のエホバイスラエルの神言たまふ我は活く必ずモア
 プのソドムのごとくにありアンモンは子孫のゴモラのごとくに
 ならん是は共々蓐麻の蔓延る處となり鹽坑の地とありて長久に

荒いつべし我民の遺さる者るをを掠めわが國民は餘さきたる
 者われらを獲ん。十この事の彼らに臨むいろの傲慢ゆる即ち
 彼ら萬軍のエホバの民を嘲りて自から誇りたればあり。十二エホバ
 は彼等あ對ひてと畏ろしくよし地の諸の神を饑し滅したま
 ふあり諸の國の民あろの處より出てエホバを拜まん。十三エ
 テオピア人よ汝等もまたわが劍あかりて殺さる。十四エホバ北あ
 手を伸てアッスリアを滅したまへん。亦ニ手べを荒して荒野の
 どき旱地とあしたまへん。十四而して畜の群もろくの類の生物ろ
 の中に伏し鷄鷄あよび刺猯其柱に頂に住み嘲る者の聲窓の内あ
 きこえ荒落たる物園の上に積り檜木の板の細工露顯にあるべし
 十五是邑の驕り傲ふりて安泰あ立をり惟我あり我の外あは誰もあ
 しど心の中あ言つゝありし者あるが斯も荒れて畜獸の臥す處
 とある者りあ此を過る者いみな嘶きて手をふるん

第一 此暴虐を行ふ悖りあつ汚きたる邑の禍あるあるは是
 の聲を聴いれず教誨を承すエホバに依頼すあの色の神お近よら
 す三ろの中にをる牧伯等の吼る獅子のごとくろの審士の明且ま
 でに何をも遺さる夜求食する狼のごとし四ろの預言者の傲り
 かつ詐める人ありろの祭司の聖物を汚し律法を破ることをなせ
 り五ろの中あいますエホバの義くして不義を行ひたまはす朝
 る朝あ己の公義を顯して缺ることあし然るに不義ある者は恥
 を知す我國々の民を滅ぼしたればろの機凡て荒たり我これ
 が街を荒涼さめたまを往來する者あしろの邑々は滅びて人あ
 く住む者あきに至り七わを前お言ひ汝たき我を畏れまた警戒
 を受べし然らばろの住家と我お凡て之につきて定めたる所の如
 く滅ぼさざるべしと然るに彼等の夙に起て己の一切の行狀
 を壊れりハエホバ曰たまふ是ゆゑお汝ら及び起て獲物をする日

いたるまで我を俟て我もろくの民を集へ諸の國を聚めてわが
 憤恨どわが烈き忿怒を盡くろの上あろとぶんど思ひ定む全地の
 わが嫉妬の火お焼はるばさるべし九ろの時われ國々の民お清き
 唇をわたへ彼らをえて凡てエホバの名を呼ぶ心をあはせて之
 あつろへあめん十わが散せし者等の女郎即ち我を拜む者エラオビ
 アの河々の彼旁よりもきたりてわきに禮ものをささぐべし十二
 の日に汝わきお對てをかしきたりし諸の行爲をもて羞を得て
 どあるべしろの時い我なんちの中より高ふり樂む者等を除
 け汝かさねてわが聖山にて傲り高ぶることありきバあり十二
 き柔和にして貧き民をあんちの中にのこさん彼らのエホバの名
 お依頼むべし十三イスラエルの遺れる者の惡を行はす誑をいす
 ろの口のうちあひ詐偽の舌あし彼らの草食ひ臥やすまん之を懼
 きあむる者あるべし十四シオンの女よ歡喜の聲を舉よイスラエ

ル^{たのし}よ樂^{たのし}み呼^よひ色^{いろ}エルサレム^{エルサレム}の女^{むすめ}よ心^{こころ}のかぎり喜^{よろこ}び樂^{たのし}め^{十五} エホバ
 すであ^{なんぢ}汝^{なんぢ}の鞫^{さむぎ}を止^やめ汝^{なんぢ}の敵^{てき}を逐^{おひ}ひらひたまへりイスラエル^{イスラエル}は王^{十六}
 エホバ汝^{なんぢ}の中^{うち}にいます。汝^{なんぢ}はかさねて災禍^{わざはひ}にあふことあらじ^{十六}
 の日^ひあひエルサレム^{エルサレム}に向^{むか}ひて言^いあらん懼^{おそ}るゝあかれ^{十七} オン^{オン}よ汝^{なんぢ}
 の手^てを^をあへ垂^たるゝあうれど^{十七} あんぢの神^{かみ}エホバ^{エホバ}あんぢの中^{うち}に
 います。彼^{かれ}は拯救^{すくひ}を施^{ほどこ}す勇士^{ゆうし}あり彼^{かれ}あんぢれたためあ喜^{よろこ}び樂^{たのし}しと、愛^{あい}
 の餘^{あま}りに黙^{もく}し汝^{なんぢ}のために喜^{よろこ}びて呼^よとりたまふ^{十八} われ節會^{せち}のこと
 あつきて憂^{うれ}ふるものを集^{あつ}めん彼^{かれ}等^らの汝^{なんぢ}より出^いし者^{もの}あり恥辱^{はぢ}あれ
 らあ蒙^かむること重負^{おもな}のごとし^{十九} 視^みよるの時^{とき}われ汝^{なんぢ}を虐遇^{あへ}する者^{もの}を
 盡^{ことごと}く處置^{ちし}し足蹙^{あへ}たるものを救^{すく}ひ逐^{おひ}ひあたれたる者^{もの}を集^{あつ}め彼^{かれ}らを
 あて其^{その}羞辱^{はづかしめ}を蒙^かりし一切^{すべて}の國^{くに}あて稱譽^{ほまれ}を得^えさせ名^なを得^えさせすべし
 二十^{二十} の時^{とき}わを汝^{なんぢ}らを携^{たづ}へるの時^{とき}わを汝^{なんぢ}らを集^{あつ}むべし我^{われ}なんぢら
 の目^めの前^{まへ}において汝^{なんぢ}らの俘囚^{さう}を^はへし汝^{なんぢ}らをして地上^{ちじやう}の萬國^{ばんこく}に

名^なを得^えさせ稱譽^{ほまれ}を得^えさせすべしエホバ^{エホバ}これと言^いふ

西
山
集
卷
之
一

詩
集

五
言

七

西
山
集
卷
之
一
詩
集
五
言
七
言
八
言
九
言
十
言
十一
言
十二
言
十三
言
十四
言
十五
言
十六
言
十七
言
十八
言
十九
言
二十
言
二十一
言
二十二
言
二十三
言
二十四
言
二十五
言
二十六
言
二十七
言
二十八
言
二十九
言
三十
言
三十一
言
三十二
言
三十三
言
三十四
言
三十五
言
三十六
言
三十七
言
三十八
言
三十九
言
四十
言
四十一
言
四十二
言
四十三
言
四十四
言
四十五
言
四十六
言
四十七
言
四十八
言
四十九
言
五十
言
五十一
言
五十二
言
五十三
言
五十四
言
五十五
言
五十六
言
五十七
言
五十八
言
五十九
言
六十
言
六十一
言
六十二
言
六十三
言
六十四
言
六十五
言
六十六
言
六十七
言
六十八
言
六十九
言
七十
言
七十一
言
七十二
言
七十三
言
七十四
言
七十五
言
七十六
言
七十七
言
七十八
言
七十九
言
八十
言
八十一
言
八十二
言
八十三
言
八十四
言
八十五
言
八十六
言
八十七
言
八十八
言
八十九
言
九十
言
九十一
言
九十二
言
九十三
言
九十四
言
九十五
言
九十六
言
九十七
言
九十八
言
九十九
言
一百
言

92-21143

✠ 立教大学図書館



95-91143